

YAMANASHI

おたけ



新年挨拶

第12回職員交流ソフトバレーボール大会

山梨県老人保健施設大会を終えて

老健リハビリテーション部会紹介

老健栄養士部会紹介

施設訪問記 峡西老人保健センター



新年挨拶

山梨県老人保健施設協議会

会長 保坂 久

(いちのみやケアセンター施設長)

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様には恙無く新春をお迎えのことと心からお喜び申し上げます。さて一昨、昨年来、食費、居住費等の介護保険制度の大改正を受けて、各施設ともそれぞれ厳しい対応を余儀なくされたことと存じます。このような大きな改正が実は多くの国民のさほど

の理解の無いまま国会を通過させ後になってから国民に既成の事実として押し付けてくる国の手法は何としても納得し得ないものがあります。

しかし、全国老人保健施設協会でも早くから改定に際しては国民が理解しやすい、そして協会としても納得する改定をと事前に要望書として政府に提出していました。即ち、要介護状態の重度化防止のためにリハビリ機能加算を継続評価すること、在宅生活支援機能の強化の積極的評価、介護老人保健施設において実施される医療の評価、そして老健としての主体的判断（自由裁量権）等の要望にもかかわらず、多くの問題を残したままこの度の改定が断行されました。

しかも政府は更に、介護療養型医療施設を暫時減らし、現在ある38万床の内、医療必要度の高い高齢者用として15万床のみを残し、残り23万床は経過措置を経て暫時老健施設やその他の介護施設にその機能を転換し出来るだけ医療保険の負担を軽減しようとしています。医療保険の適用足るべき介護高齢者を出来るだけ介護保険にまわし、その大半を主として老健施設が担うべきとするのが今の政府の考え方ではないでしょうか。このことにより介護保険の負担は平成24年度までに約1000億円増え医療保険は逆に4000億円減の見込みと聞きます。だとするならば、やはり前述の全老健が要望する事項を実現させる以外には方法はないと考えます。特に、医師、看護師等医療従事者を多く配する老健施設にあっては、必要とする医療関与の面は積極的に医療保険適用範囲を広げる必要があるのではないのでしょうか。でなければ老健施設は益々経済的に圧迫されるか、介護高齢者の医療レベルの低下が一層懸念せざるを得ません。介護老人保健施設が担う中間施設としての役割は病院から老健へ、そして在宅へと移行するのが本来の中間施設の役割だと思えます。しかし巷間には老健は、在宅から老健へそして特養へのパターン、病院から老健へ、そして特養へのイメージが一般的であるようにも見受けられます。だとするならばこれは我々老健施設を担うものとして誠に心外なものと言わざるを得ません。可能な限りの機能を駆使し出来るだけの努力を持って、入所者に対するケアプランを頻繁に練り上げて、初めて在宅への道を切り開いているのが真の中間施設としての老健の姿ではないのでしょうか。巷間で言われる老健では絶対あってはならないと思えます。また私は老健こそ最も適したターミナルケアの場となるべきと考えています。それには前述の全老健の要望をきっちり国が認め医療面、介護面の保険を適切に利用できる条件整備をすることによって初めて可能になることだと思えます。

今年の初夢として語ってみましたが、夢ではなく一日も早くこれが老健の真の理念になることを望んでいます。

最後に本年3月をもって山梨県老人保健施設協議会全役員任期が終了します。新年早々に次期役員を全会員の総意をもって選出していただき、益々の当会発展の為ご尽力くださいますことをお願いし、簡単ではありますが新年のご挨拶といたします。

『介護サービス情報の公表』制度に関する申し入れ書

以下の文書は、平成18年10月26日付で全老健会長が厚労省老健局長あてに通知した内容を参考掲載します。

1. 調査・公表に係る手数料の適正化及び透明化

先般の介護報酬改定により、介護老人保健施設は非常に厳しい経営を強いられている中で、この調査内容や調査時間等から考えても、調査・公表に係る手数料があまりにも高額である。また、複数併設により介護サービスを提供している事業所にとっても、1事業所単位の手数料となっているため大変に大きな負担となっている。このようなことから費用について、適正化・透明化が図られるよう申し入れる。

2. 第三者評価の義務化及び調査員等の質の向上・標準化

各評価制度が横断的に検討され、利用者及び介護事業者双方に役に立つ、より質の高い第三者評価が構築され、更に義務化を推進させたい。



奥石副会長

平成18年12月10日（日）、甲府総合市民会館・山の都アリーナにて「第12回山梨県老人保健施設協議会施設職員交流ソフトバレーボール大会」が開催されました。

今年は、県内29施設中26施設の参加があり白熱した試合と、応援合戦が展開されました。

毎年この日ばかりは普段の仕事の疲れやストレスを感じさせないくらい、参加者全員の凛とした表情が目立ちました。それぞれ各施設が日々の忙しい業務の合間をぬって練習してきた成果が十分発揮できたのではないかと思います。

試合開始。各施設、試合に出る選手はもちろん、応援する職員にも熱が入り趣向を凝らした応援も、楽しみの一つになっていると思います。コート内では普段仕事で見せているであろうチームワークを存分に発揮し、「オッケー」「オーライ」「声かけてっ」など選手一丸となってプレーしていました。また、コートサイドでも選手に負けなくらいの声援が飛び、各施設それぞれ工夫を凝らした応援グッズ片手に声が嘎れるまで応援していました。試合が終わると、対戦相手と握手し互いに健闘を称え合う姿も毎年の事ながら、職員交流ソフトバレーボール大会の一番意味するところではないかと思えます。



優勝した甲州ケア・ホーム



試合結果。結果は見事二連覇を達成した『甲州ケア・ホーム』が優勝。惜しくも前回の雪辱は果たせませんでした。『峡南ケアホームいいとみ』が去年と同じ準優勝でした。応援大賞は『ナーシングプラザ三珠』でした。結果は優勝・準優勝ともに去年と同じでしたが、大会のレベルは年々高くなってきていると思います。どの試合も接戦が繰り広げられ、施設内の仲間に限らず他施設の職員とも本大会の主旨である「職員の交流」を大いに図れたと実感しております。

まとめ。年に一度の恒例行事として行われている本大会も今年で12回目を迎え、施設間の交流・親睦を深めるだけでなく、日頃の仕事での意見交換の場としても大変意味のある大会になったと思います。

最後に今大会の運営にあたり、ご尽力いただきました県老健・保坂会長以下関係各位の皆様、お疲れ様でした。最後まで応援、ありがとうございました。

福利委員（勝沼ナーシングセンター）

成績結果

優 勝	甲州ケア・ホ - ム
準 優 勝	峡南ケアホームいいとみ
第 3 位	峡西老人保健センター つる（敗者復活戦から）
応援大賞	ナーシングプラザ三珠

➡ 「介護サービス情報の公表」の調査員は、「調査事務に関する専門的知識及び技術を有する者」と定められてはいるものの、その資質のばらつきは否めない。調査を行なう調査員に専門的知識がなければ、適正な情報の公表になりえないことから、その質の向上・標準化が図られるよう申し入れる。

また、調査機関においても、その資質のばらつきが否めないところから、サービス事業者の意思により自由に調査機関の選択ができるようにすべきである。

以上により、サービスの質の向上につながる情報の公表・第三者評価への制度の見直しを求む。

基本情報や調査情報の項目は、実地指導や先駆的な都道府県に於いて実施されている第三者評価の項目と重複するものが多い。また調査員が各調査項目の検証を行う「介護サービス情報の公表」の調査は、従来から行なわれている実地指導の内容や具体的に評価を行う第三者評価の方が、利用者にとって、より一層有益な選択の指標となることから、各制度を横断的に検討し、事業者にとっても有用なサービスの質の向上につながる制度への見直しを申し入れる。

山梨県老人保健施設大会を終えて

山梨県老人保健施設協議会理事

研修委員長 臼井行夫
社会福祉法人山梨櫛の会理事長

(老人保健施設甲府相川ヶアセンタ -)



臼井研修委員長

平成18年度、第九回山梨県介護老人保健施設大会が昭和町アピオ甲府に於て、県下29施設三百余名の役職員参加のもと盛大に開催されました。

山梨県老人保健施設協議会の保坂久会長のあいさつに始まり、来賓としてごあいさつをいただいた山梨県福祉保健部長、中澤正史様からは、日頃の老健職員の努力に対し丁寧なる感謝と励ましの言葉を頂戴いたしました。

講演に移り、介護業界では高名な「生活とりハビリ研究所」の三好春樹先生より、軽妙かつ判り易い口調で、介護は「主体的個別的に対応すべき」との認知高齢者に対する長年の経験と研究に基づく結論を説いていただきました。

演題発表では29題の発表がありました。本年からは会場を二つに分けさらに細かく発表していただき、質問も活発に出されました。本年も各セッション別の優秀賞の表彰もあり惜しくも選に漏れたチームからは、残念という声と同時に来年こそはとのリベンジの声もあがりました。

皆さんにはこの研究をここで終らせることなく、さらに質の高いサービスの糧としていただければ、本大会の目的とするところにより近づくものと確信いたします。



中澤県福祉保健部長



保坂会長

おわりに、本大会に関わって下さった全施設と関係者の皆様に深甚なる敬意を表しご報告と致します。



三好春樹先生

理学療法士 (PT) 生活とりハビリ研究所代表
1950年 (昭和25年) 生れ

高校中退の後、数々の職業に就き、1974年 (昭和49年) から広島県内の特別養護老人ホームに生活指導員として勤務。

文部省大学入学資格検定を経て、九州リハビリテーション大学校へ入学後、老人介護の現場で老人のリハビリテーションに従事する。

1985年 (昭和60年) に退職、生活とりハビリ研究所を主宰し、各地の通所訓練や在宅訪問に関与しながら全国で、「生活りハビリ講座」を開催。年間動員数は50,000人にのぼる。

高齢者ケアの情報誌 (元気が出る情報交流誌) 『Bricolage』 発行人として執筆活動も展開し、著書に『関係障害論』『じいさん・ばあさんの愛しかた』など多数。



演題の一覧

セクション1

座長 峡南ケアホームいいとみ 看護師長 高田千里

- ▶ リラックゼーションを求めてフットケアへ
介護老人保健施設「つる」 介護福祉士 関口 弥生
- ▶ 個々に楽しめる余暇活動を通して
～こんだ いつあるで～
ケアセンターいちかわ 介護福祉士 山本 和哉
- ▶ 口腔ケアの手技について考える
～さらば舌苔～
サンビューかじかざわ 介護福祉士 安永 文江
- ▶ 褥瘡改善に向けて
～栄養管理とADL拡大への働きかけ～
みのりの里 介護老人保健施設 旭ヶ丘 看護師
横田由利子
- ▶ 楽しいおやつバイキング
～どれにしようかな～
あさひホーム 介護職員 河野妃磨子
- ▶ つるつるお肌への挑戦
～カリンの種を使ったスキンケア～
NAC湯村 介護職員 中村 健雄

入所者の疾患別味覚調査

～食生活を楽しむ為に～

ケアホーム花菱 管理栄養士 山里 瑠美

セクション2

座長 フルリールむかわ 理学療法士 高橋 暁

- ▶ 家庭的な生活環境を目指して
ナーシングプラザ三珠 介護職員 石原 伸
- ▶ みんなで楽しむ園芸レク
～育てて採って旨かった～
甲府かわせみ苑 介護士 原 英史
- ▶ 当施設における入浴体制の試み
～個別での入浴ケアを試みて～
山中湖あんずの森 看護師 小林 麻美
- ▶ あっ、そうなんだ!!
～3年間の事故報告書の分析から見た施設の現状～
峡南ケアホームいいとみ 介護福祉士 沢登 岳
- ▶ わかっちゃいるけど食べられない
～体重・体力の維持を目指した一関わり～
玉穂ケアセンター 管理栄養士 村林 みほ
- ▶ ゆったり入ろうー一日入浴
～もう スクリーンはいらない...～
甲府相川ケアセンター 介護職員 小河 孝子
- Tさん笑顔をありがとう
ノイエス 介護職 中込 文和
- ▶ 毎日レクリエーションを実施しよう
～今の瞬間を楽しく～
関西老人健康センター 介護福祉士 雨宮 尊

セクション3

座長 関西老人保健センター 介護支援専門員

柴 春美

- ▶ 夢を叶えるデイサービス
～四季に触れ地域と交流した1年間～
はまなす・通所介護センター ラベンダー 介護員
堀内 春彦
- ▶ 楽しく作り、美味しく食べよう“手作りおやつ”
ノイエス 介護福祉士 河西 保子
- ▶ ほんとうに住宅支援ができたのでしょうか？
～平成17年度の利用状況から～
しおかわ福寿の里 支援相談員 宮沢 秀一
- ▶ 生きる基本、食べる喜びを取り戻して
～胃瘻から経口摂取をめざして～
ひばり苑 管理栄養士 本田 和子
- ▶ 「にこにこ食べよう会」
～楽しく食べれる香りのパワー～
フルリームむかわ 介護職員
清水 みな・三井 恵子
- ▶ 脳の活性化を図る為の試み
～勉強が出来てうれしいよ～
勝沼ナーシングセンター 看護師 佐藤はるみ
- ▶ 新しい認知症ケアの提供を目指して
～認知症サークルの活動の試み～
甲州ケア・ホーム 介護福祉士 那須 美幹

セクション4

座長 勝沼ナーシングセンター 管理栄養士

姫野葉子

- ▶ 見守りの中にある安全な暮らし
～利用者本位!!～
峡北シルバーケアホーム 介護福祉士 河西 良太
- ▶ 母校を訪ねて世代間交流
～中学生とお年寄りが太鼓で交流しています～
はまなす 介護福祉士 渡辺 秀美
- ▶ 地域への復帰がうまくいかなかったケース
～新介護保険での地域支援がうまく行かなかった
ケースの因子分析～
甲府南ライフケアセンター 介護職員 篠崎 弘祐
- ▶ 個別入浴
～個別入浴で得られた効果～
ももくら 介護職 鈴木いつ子
- ▶ 認知症の環境づくりに取り組む
～認知症のケアを考える～
いちのみやケアセンター 看護師 土屋 和美
- ▶ バーチャルの世界から覗く高齢者の姿
～介護に活かす介護職員の疑似体験～
山梨ライフケアホーム 介護福祉士 北澤賢一郎
- ▶ 栄養ケア・マネジメントの取り組み
～入所者の栄養状態の現状報告～
甲府相川ケアセンター 管理栄養士 堀口 一美

老健リハビリテーション部会紹介

平成18年度老健リハビリテーション部会 会長 工藤 宏

(介護老人保健施設はまなす 作業療法士)

山梨県老健リハビリテーション部会は、県内に29施設ある介護老人保健施設に勤務している理学療法士、作業療法士、言語聴覚士で構成されている部会です。

今年度の活動については、平成18年4月からの介護保険法改正で新たに創設された、「リハビリテーションマネジメント」や「短期集中リハビリテーション」、「認知症短期集中リハビリテーション」の情報交換を中心に実施しております。特に、「リハビリテーションマネジメント」はリハビリテーションを計画的に進めていくためのプロセスを確立することと、「多職種協同」をキーワードに創設されたものですが、その書類の多さとリハビリ業務とのバランスが取りにくいという問題が生じていることも現状です。加えて、介護老人保健施設のリハビリテーションスタッフは1人職場や経験の浅いスタッフだけで構成されている施設が少なくないという状況があるため、この部会を通して各施設の取り組み方法や今後の活動のアドバイスを得られるような環境づくりも徐々に進めております。

その他として、他団体（写真は福祉用具事業所による車椅子紹介）との接点を持ち、その分野の最新情報の取得や積極的な意見交換が出来ること、連携を図るきっかけをつくる事が可能になる場にしていく方向性で企画もしております。

今後は、リハビリテーション分野に限らず、どの職種でも話題になる「認知症」についても部会を通じ、リハビリテーションとしての取り組みを少しずつ考えていきたいと思っております。

非常に試行錯誤の取り組みではありますが、少しずつ介護保険のリハビリテーションが前進していけるように頑張りますので宜しくお願いいたします。



老健栄養士部会紹介

平成18年度老健栄養士部会 会長 姫野 葉子
(勝沼ナーシングセンター 管理栄養士)

昨年10月より栄養ケアマネジメントが導入されました。これにより私たち栄養士に課せられた任務は“全入所者の栄養状態の把握”と共に、“栄養士の存在意義を示せ”であると思っております。

老健栄養士部会でも第1回目の部会では、栄養ケアマネジメントの実際を知ろうということで、各施設の栄養士が持ち寄った計画書をもとに勉強会を行いました。多種多様な計画書の内容や違った角度からの



栄養ケア、また他職種との連携の取り方など、とても1日では足りないくらいの意見や情報が飛び交い、どの施設の栄養士からも入所者の栄養状態改善に向けての熱意が感じられました。しかし、栄養状態の改善と一言でいっても、それはとても難しく容易なものではありません。

例えば、スクリーニングで栄養状態は良好（低リスク）と判定され、食事も全量摂取されているにも係わらず体重減少が見られる方。スクリーニングでも栄養状態が不良（高リスク）と判定され、食事摂取の拒否が強く殆ど口にしてもらえない方。他にも色々なタイプの入所者がおり、その方にとって何が一番良いケアなのか試行錯誤の毎日です。

ここで重要なのは、なぜ体重減少してしまうのか？また、なぜ食事の拒否があるのか？といった疑問を解決するには常に入所者の傍らで介護ケアをする看護師や介護員からの情報なのです。体重減少している方の状況を尋ねてみると、今まで以上に徘徊が強くなり一日中動き回っているとのこと。つまり今まで以上に活動量が増えたことにより、必要なエネルギー量に不足が生じていたことに気づかされます。そして食事の拒否がある方に関しては、毎日のようにあったご家族の面会が最近はないとのこと。つまりは精神的な寂しさから食事の拒否が見られるのでは？・・・と解決の糸口が見えてくるのです。ただ単にエネルギーの高い食品を提供し、それを摂取していただくだけがケアでなく、精神面からのアプローチも必要になってくるということなのです。



今後も栄養士として美味しく安全に召し上がっていただける食事の提供に栄養士部会ともども力を入れて参りますので、多職種の皆様方のお力添えをよろしく願います。

施設訪問記

峡西老人保健センター

(訪問者 恵信ケアセンター)



雲ひとつない、秋晴れの心地よい11月のある日、峡西老人保健センターを訪問させて頂きました。甲府盆地の西部、楡形山の麓に位置し、閑静な町並みに溶け込んだ施設が見えてきました。

今回は、施設の特徴や目標などについて川崎光洋理事長と小笠原仁事務長にお話しを伺いました。

施設の特徴

平成5年4月、認知症専門棟を有する県内初の施設として開設された峡西老人保健センターは、家庭の一室を思わせるような障子と木目調をベースにゆったりとしたスペースで家庭的な雰囲気が印象的でした。

開設当時は、認知症に対する理解が少なかったため、他の施設や病院等で受け入れを断られる方も多くいらっしゃいましたが、併設病院の老人性認知症疾患治療病棟で培った知識と技術を基にそういった方々を受け入れ、積極的な介護を行ってきました。現在も利用者様のことを第一に考えたケアを行っているとのことでした。

また、設備投資は必要最小限に抑え、その分職員の育成に力を入れています。利用者様が満足できるサービスを提供するには、職員一人一人の質の向上が一番だと考えるからだそうです。そのため職員の向上心も高く、現在では職員の大半が有資格者であり、離職率も低く、質の高いケアが提供されていることが伺えました。

地域交流とレクリエーション

峡西老人保健センターでは、開設の翌年から毎年「峡西老人保健センター主催のゲートボール大会」を開催しているとのことでした。今年で12回目を迎え、南アルプス市民で65歳以上の方であれば誰でも参加できるので、今回も32チーム210名と大勢の方々の参加がありました。また、ゲートボール大会の当日は、グラウンド内に「健康相談コーナー」を設置し、医師・看護師が様々な相談やアドバイスをし参加者も喜ばれていたそうです。

また施設内においても、カラオケ・ゲートボールなどのレクリエーションを通じ、楽しみながら仲間作りをし、お花見・盆踊りなど季節感ある行事も毎月行われています。



今後の目標と取り組み

「利用者様が明るく家庭的な雰囲気の中で、家庭への復帰を目標とし、生きがいを持って療養生活を送っていただくために、生活を支える介護、自立を支援する介護」を目指し、少しでも自立した生活が出来るよう、その人

に一番あったりハビリテーションを提供して行きたい。また、利用者様が充実した日々を過ごして頂くには、職員の更なるスキルアップが必要で、施設としてもそれをバックアップして行きたい!とおっしゃっておられました。

取材を終え、利用者様に対する思いやりある取り組みが利用者様を笑顔にしているのだと強く感じました。

施設の概要

入所定員	92名(短期入所療養介護を含む。)
通所定員	20名
協力病院	高原病院
協力歯科	つちや歯科医院
所在地	〒400-0405 南アルプス市下宮地421
電話番号	TEL 055-282-7000 FAX 055-282-7003
設置運営主体	医療法人 南山会

シリーズ さくひん



心温まる作品 (峡西老人保健センター)

当施設では、毎年11月に文化展を開催し、日頃入所者様が作られた作品を展示・発表しています。

今年は編み物が好きな入所者様たちがいくつかの作品を提供してくださいました。たわし、膝掛け、毛糸のモチーフなどカラフルで暖かそうなものばかりです。

編みながら、「昔は色んなものを編んでやったよ...」と、家族のことを思い出したり、「きれいだね~、しょうずだね~」と他の入所者様や職員に声を掛けられ、交流が深まり、心も温かくなっていました。

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

さて、平成18年度は、介護サービス情報の公表がはじまりました。各施設の入所事業や居宅介護支援事業の内容は、

URL (<http://www.kaigo-kouhyo-yamanashi.jp/kaigosjp/Top.do>)で見ることができますが、もっと県や調査実施主体には県民に向けて積極的な広報活動を行ってほしいと考えています。また、1年目ということで問題点も多くあるように思います。具体的には、今後の第三者評価との関連性がどうなるか、日程調整が行えない、老健で行っている複数事業について同日調査をお願いしたい、各県毎の調査費用の乖離があり、事業毎に費用発生する、調査実施主体等に於ける収支の情報開示が無いことなど、私も事業者には疑問点が多く、肝入りで開始した県や調査事業委託者にはこれらの問題点を早急に解決して欲しいものです。

兎に角、老健施設の経営はこの様な調査に係る出費やスタンダードプレコレーションに係る費用等が益々高騰していきませんが、口腔ケア・認知症ケア・栄養等の加算を確実に実施し、また節約も行いつつ医療保険と介護保険、療養病床再編が確実に伸展する中で老健施設の足腰を固めながら薫々と運営していこうと思っているところです。

突然ですが、訪問先のある会社で「四自」の精神という掲示が出ていました。それは、自覚：自分の置かれている立場・役割・状況をよく確認する 自発：何事にも自ら進んで積極的に行う 自治：自分自身を管理する 自信：自分の仕事に責任を持ち、可能性を信じ、誇りを持つ。この精神がホスピタリティーワークにもあてはまり、我々の基本と考えます。さらに望まれるのは心の持ち方ではないでしょうか。京都の永観堂を訪れたとき、やわらかい心、かわかない心、あたたかい心という書を見ました。自分には何気なく過ごしていた心の持ち方について気づかされ、常に頭の隅において置くようにしています。皆様方の頑張りが仕事されている場面を思い浮かべながら、年頭にあたり徒然な思いを書きとめました。

理事・広報委員長 中島 育昌
(サンビュージャカざわ施設長)

山梨県老人保健施設協議会広報誌

編集・発行 山梨県老人保健施設協議会

広報委員会

事務局 〒405-0076

山梨県笛吹市一宮町竹原1255-1

いちのみやケアセンター内

TEL.0553-47-4811

FAX.0553-47-4815

ホームページ:

<http://www.y-rouken.jp>

Eメール:rouken@tiara.ocn.ne.jp

印刷 株式会社 少国民社